
とある冒険～星と星 時空と時空 運命の巡り合わせ～

ダイヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある冒険〜星と星 時空と時空 運命の巡り合わせ〜

【Nコード】

N3750Z

【作者名】

ダイヤ

【あらすじ】

ある世界でソニックがいつものように仲間達とそこら辺を走っていたらいきなり目の前に謎の穴が現れて皆を吸い込んでしまったソニックが目覚めると謎の世界が広がっていた。そして目の前には謎の女の子がそしてソニックは仲間を探すためその女の子と新たな冒険を始めるがその女の子にはある秘密がー！？
ソニックシリーズ大冒険！

プロローグ（前書き）

一回書いてみたかった冒険小説 良ければ見てください！

ブローグ

ここはどこ？

自分は誰？

周りにあるのは 闇 何処を見回してもすべて黒一色で他には何も
ない

自分という物がある感触はある

でも

自分の顔も 男なのかも女なのかもすべて

わからない

自分は誰？

じいぢやいじい？

自分は何者？自分は誰？

すべてがわからない

どうしてこんなにもなにもかもがわからないのに自分がいるとわかるのか？

どんなに考えても考えられない

まるで

考えると言われるように

体も動かない 考える事も出来ない ここが何処なのかも 自分が
誰なのか全て

分からない

でもなんで自分がいるとわかる？それもわからない

わかるのは
闇

自分という存在

他には

何も

わからない

ここは謎の
闇

とある
闇

そして何処からか声が聞こえた

「お前は……だ……の……なんだ……奇跡の……だ……」

なぜか意識が朦朧としてところどころがかすれて聞こえない

「だぞ……必ず……だぞ……そして……必ず……必ず……」

何を伝えたい？何を言いたい？

何かが見えてきた

光だ

また声が聞こえてきた

「これからお前は……」

全部聞き取る前に光は自分を包みこんだ

そして

世界が変わった

闇から

光に

ここから

全てが始まる

プロローグ（後書き）

感想まっています（ってか下さい）

始まり（前書き）

この小説はソニックとオリジナルキャラの女の子が主役です

始まり

ここはとある草原そこには青い針鼠とその仲間達がいた

ソニック「今日もいい天気だねー！」

テイルス「そうだねソニック」

ソニックの言葉に返事を返す2本の尻尾を持つ狐マイルス・パウワ
ーことテイルス ソニックの相棒だ

ソニック「のんびり過ごすのもいいが最近暇だぜ」

テイルス「平和も良いことだよ確かに最近ひまだけど」

エミー「じゃあ私とデートしてー」

そう言ってソニックをデートに誘うピンクの針鼠エミー・ローズ
ソニックが大好きな女の子だ

ソニック「断るよ」

そう言って逃げるソニック

エミー「まちなさいー!!」

エミーもお馴染みのピコピコハンマーを取り出してソニックを追い掛ける

テイルス「やれやれ…」

テイルスも呆れながら二人を追いつける

ソニック「ここまで来れば安心だろ…ん？」

逃げてるソニックが見つけたのは白い穴 分かりやすくいうと小さな
めのブラックホールの白い版

ソニック「なんだこれ…」

ソニックがその穴を見ていると…

エミー「なに見てるの？」

テイルス「どうしたの？」

自分に追い付いた二人がいた

ソニック「H e y！二人共あれ見てくれ」

ソニックはそう言ってさっきの穴を指差す

エミー「何あれ？」

テイルス「穴…？」

ソニック「今見つけたんだ」

3人がそう言って穴を見ていると…

ゴオオオオオ!!

ソニック「!?!」

いきなり穴が大きくなって周りの物を吸い込み始めた

ソニック「な、なんだ!?!」

ティルス「うわわ!!」

エミー「キャー!!」

そして穴は完全に広がりソニック達を吸い込んで穴は消えた

ソニック「う…ここは…？」

ソニックが目を覚ますとそこはさっきまでとは違い 色とりどりの
花が咲いている原っぱにいた

ソニック「ここは何処だ！？テイルス達は？」

仲間が居ない事に気付くソニック

ソニック「はぐれたか…探しに行くか」

そう言って原っぱを駆け抜けるソニック

ソニックが仲間を探しているとある一人の女の子が倒れていた

ソニック「お、おい大丈夫か？」

「……うう」

女の子は目を覚ましてソニックを見た

「……」
「助けてくれたのか？」

ソニック「いや、倒れていたんだ、大丈夫か？」

「……」
「ああ、平気だ」

その女の子の見た目と格好は見た目は紫色の針鼠でなぜか黒い羽根があり黒いワンピースを着ていて黒いブーツをはいている

ソニック「なんでこんな所で倒れていたんだ？」

「……」
「えつと……」

その女の子は思い出している

???「わからない…」

ソニック「へ？」

???「確か…何故か走っていて疲れて気を失ったんだ」

アバウトな説明にソニックも困っている

ソニック「まあ…仕方ないか…俺はソニックザヘッジホッグだ宜し
くな!!お前は？」

???「自分は…」

そう言って自分の名前を言おうとするが…

???「…わからない」

ソニック「…え？まさかお前…」

「???」記憶がない…なにかも…何も思い出せない!」

ソニック「なんて事だ…」

ソニックとその女の子はその場に立ったままだった…

続く

始まり（後書き）

感想待ってまーす

記憶のない少女

ソニック「記憶がないなんてな……」

???「すみません」

ソニック「いや、いいさ」

???「……」

ソニック「じゃあ、これからは気をつけろよ」

???「何処かいくのか？」

ソニック「仲間を探すのさ」

???「仲間を？」

ソニック「ああ」

ソニックはここにワープさせられた白い穴の事を話した

「???」へえ…」

ソニック「じゃあな」

「???」あ…あの…」

ソニック「?」

「???」俺もついていっていいか?」

ソニック「へ? (こいつ俺系なんだ…)」

「???」お前には助けて貰ったし…お前の仲間を探してれば記憶が戻るかもだし…」

ソニック「別にいいぜ、でもお前をなと呼べばいい?」

「???」ん…」

考える彼女を見てソニックは

ソニック「リングでどうだ？」

???「は？」

ソニックの発言に目を丸くする

ソニック「手首にリングが付いてるしさ」

???「…」

彼女が手首を見ると確かに銀色のリングがついていた

ソニック「どうだ？」

???「いいぞ」

ソニック「よし！じゃあ宜しくなリングー！」

リング「ああ」

二人は握手をして仲間を探すそしてリングの記憶を探すための旅に出るしかしこれからソニック達が凄い冒険をするなんて誰も知るよしもなかった…

???「あいつを見つけた…至急作戦を実行する…」

木の上で誰かが無線機を使って話している

???「ああ…わかってるまた連絡する」

ぴっ

通信を切った音がした

「……まずは様子を見とくか……」

謎の人物はソニックとリングを見つめていた……

記憶のない少女（後書き）

一応今のところのリングのプロフィールです

名前 リング（仮）

年齢 不明

性別 女

身長 105？

体重 秘密

一人称 俺

性格

かなり男っぽい性格 ソニック同様挑戦的

これは今のところのリングのプロフィールです

クリスタル村と…（前書き）

今回は新たなオリキャラがでます

クリスタル村と…

ソニックとリングは仲間を探すために走っていたリングは走りはその
こまで速くないが飛ぶとソニック並の速さになる

ソニック「お前は飛ぶとはやいな」

リング「ああ 何故かな」

そんなこんなで…

クリスタル村 オリジナル

ソニック「綺麗な村だな」

リング「ああ」

テイルス「ソニック!!」

ソニック「テイルス!!」

なんとクリスタル村にテイルスがいた

ティルス「誰？」

リングを見て不思議に思うティルス

ソニック「こいつは…」

ソニックは説明をした

ティルス「へえ…」

ソニック「ところで此処が何処かわかるか？あの白い穴の事も…」

ティルス「実はまだわからないんだよ…でもここは異世界って言うことはできるよ」

ソニック「そうか…」

ティルス「僕はもう少しここで調べとくからそこら辺を走っていたら？エミーもこっちにいるだろうし…」

ソニック「そうするか…リングはどつする？」

リング「ソニックについてく…」

ソニック「じゃあ頼むぜテイルス」

テイルス「うん！！」

そしてソニックとリングは走っていった

ソニック「ここは…」

リング「…」

ソニック達は今森の前にいた

ソニック「いくとするか」

リング「…」

リングも頷いて森に入っていく

30分後

ソニックとリングは森の一番奥で休んでいた

ソニック「ふゝ…どうだなんか思い出せそうか？」

リング「…」

リングは黙って首を横にふった

????「見つけたぞ！」

ソニック リング「!？」

そう言つてソニック達の前に現れたのはカラスの男（ジェットの黒い版だと思つてください）

ソニック「誰だ？」

????「名乗る必要なんかない」

ソニック「リングの知り合いか？」

リング「知らない」

????「リングが名前か」

リング「いいや、これは仮の名前だ」

????「記憶がないのか」

リング「そうだが」

ソニック「そんなことよりお前の目的はなんなんだ？俺達になんか
ようか？」

???「おっと、確かにあんまり無駄話してる場合じゃなかったな
俺はお前ではなくお前に用があるんだ」

そう言つてリングを見る

リング「…」

ソニック「リングを知ってるのか？」

???「詳しくは知らないがな」

リング「俺になんの用があるんだ」

???「…」

リングが聞くと男は自分の背中にある銃を取り出して銃口を二人に

向けて言った

「???」ある方の命令によってリングー!! 貴様を捕らえる!!」

クリスタル村と…（後書き）

感想待ってます

とある軍事企業（前書き）

今回は????の事が少しわかります

とある軍事企業

ソニック達は???の言葉にびっくりしていた

リング「俺を捕らえる!？」

ソニック「どういう意味だよお前!」

???「そのままの意味だ俺はリングを捕らえに来たそれでいいだろ?」

ソニック「よくねえよ!どうしてリングを狙う?」

???「お前わからないのか?そいつの価値を」

ソニック「はあ?」

???「ふん」

リング「人をまるでもの扱いして…名前も名乗らず失礼な奴だ」

???「まあそうだな…じゃあ教えてやるよ俺はブラック、ブラッ

ク・クロウだ」

ブラック・クロウと名乗る男そして二人に銃をむけるしかし二人が
ここであっさり諦めるわけがない

ブラック「あの時はぬかったがもうあんなミスはしない！」

ソニック「あの時？」

ブラック「言う必要ない」

ソニック「…」

ブラック「…」

ソニック「今だー！」

ソニックが一瞬の隙をついてリングを抱えて逃げ出した

リング「うわ!？」

ブラック「!待て!」

隙をつかれて必死に追い掛けながら銃を撃つブラックしかしソニックはそんなの慣れっこだ銃のたまを避けていく

ブラック「ちっ!」

ソニックの速さに敵わず差をつけられる

ブラック「ちっ…まあいいまだまだチャンスはたくさんある」

諦めるブラックと逃げ続けるソニック

森の入り口前

ソニック「ここまで来れば安心だろ…」

リング「とりあえず下ろしてくれ…」

ソニックにお姫様だっこされ顔を赤くしているリング

ソニック「ああ」

リング「ふう…」

ソニック「それよりあいつは何なんだ!？」

リング「わからない…」

ソニック達が悩んでいると…

「???」もう安心しきっているのか?」

ソニック リング「!？」

そこには先程引き離れたブラック・クロウがいた

ソニック「な 何故!？」

ブラック「こんな森で引き離れたとしても逃げそうな場所位わかる」

ソニック「なるほど…」

リング「お前は一体何者なんだ? どうして俺を捕らえる!？」

ブラック「俺はとある軍事企業のブラックスターズの幹部だ」

ソニック リング「軍事企業!？」

ブラック「リングはそのボスからの命令で捕まえろと言われている邪魔をするなら消えてもらう」

ソニック「へん! やれるものならやってみな!！」

リング「おい! ここは流石に危険だ! ! 相手は銃があるのに! !」

ソニック「…」

確かにと考えるソニック

ブラック「なら本当に消えてもらおう!」

銃を構えるブラック

ソニック絶対絶命の大ピンチ!!

とある軍事企業（後書き）

パラダイスの方更新したいけどネタが…

滅びた村と影の謎（前書き）

ソニックどうなる！

滅びた村と影の謎

ブラック「覚悟はできてるか？」

ソニック「…」

ソニックはなんとかならないかと考えているその時足下にあるものがあつたそれを見てそれを見てソニックは笑みを浮かべる

ブラック「死ね!!」

ブラックが銃の引き金をひくとソニックはリングの肩をつかみ…

ソニック「カオスコントロール!!」

しゅぱぁん!!

ソニックとリングは光に包まれて消えた

ブラック「な…!？」

そうソニックは足下にカオスエメラルドだったのだ　しかし何故カオスエメラルドがここ異世界にあるのか？　まあそこはおいといて…

しゅぱぁん!!

ソニック「ふう…危なかった…」

リング「な…何なんだ今の!？」

ソニック「カオスエメラルドって言う奇跡の宝石を使ってワープしたのさ」

そう言ってリングに赤色のカオスエメラルドを見せる

リング「へえ…綺麗だな」

やはり女の子なのかカオスエメラルドに素直に反応した

ソニック「そっぴやとっさにここに来ちまつたけどどこ何処だ？」

今ソニック達がいるのは周りは物が散乱していたり家などはもう瓦礫の山と言ってもいいだろうもつと分かりやすくいうとあの白銀の針鼠の住んでいる世界の一部と言ってもいいだろう

リング「廃墟…？」

ソニック「滅びた村なのか…？」

ふとソニックが横を見ると看板があつたそこには…

滅び村

…と書いてあつた

ソニック「リング」…そのまんまかよ！この村の名前！」

あまりにもそのまんまなので思わずリングまでもが突っ込んでしまった

ソニック「ここは滅びるためにある村か!!」

リング「…ん？」

ソニック「どうした？」

リング「あそこらへんから煙が…」

リングが指差す先には確かに煙があがっていた

ソニック「行くか」

リング「ああ」

二人は瓦礫の山をジャンプしながら煙があがっているところにむか
った

ソニック「これは…」

リング「…」

煙があがっている周りには謎の影みたいに黒くてバイオハザードに
でくるような犬がいたしかもたくさん（変な例えですいません）

ソニック「こいつらは何なんだ？」

リング「わからない…だが嫌なオーラを感じる」

犬「グギヤアアア！！」

犬がいきなりリングに飛びかかってきた！

ソニック「リング！」

リング「はあ！！」

ばし！！

犬「！？」

なんとリング回し蹴りをして犬はその場に倒れた

ソニック「お前強いんだな！！」

リング「…いくぞ」

ソニック「ああ！！」

二人は犬の大群に突っ込んで行った

滅びた村と影の謎（後書き）

次回は……

超能力者と音速と

二人は今謎の影みたいな犬と戦っている二人とも強く勝機はあったが簡単には行かなかつたなんせ相手は10匹以上いるうえ体もなかなか大きい二人の体力面が限界をつく前に何とかしたい医療品も持っていないので長期戦にも持ち込めない

ソニック「やってもやってもキリがないな!!」

リング「このままだと体力が…」

もう半分は倒したがまだ8匹いる

犬「シャア!!」

犬がいきなり後ろから二人に飛びかかってきた!

二人「や、ヤバイ…!!」

二人は気付くももう手遅れだったと思っただが…

「???? はあ!!」

犬「!」

なんと犬がいきなり止まり後ろにいる犬の大群に突っ込んでいった
二人はびっくりしていたがお陰で犬は全滅

ソニック「な…」

リング「今のは一体…」

「???? 大丈夫か?」

ソニック「シルバー!?!」

シルバー「ソニック!?!」

そこにいたのはシルバーだった先程犬を止めたのも彼だ

シルバー「所でこいつは誰だ?」

ソニック「こいつは…」

ソニックはまた全てを説明した

シルバー「なるほどな…」

ソニック「所でお前は どうしてここに？」

シルバー「お前達と一緒にさ未来で白い穴があってそれに吸い込まれたんだ」

ソニック「それでここにいと…」

シルバー「ああ」

ピピピピピピピ！
ピピピピピピピ！

ソニック「うわ！？」

いきなりソニックの持っている通信機が鳴り出した（いつの間に持ってた！？）

テイルス「ソニック！！」

ソニック「テイルス！！なにか分かったのか？」

テイルス「少しならね」

ソニック「分かった今からそっちに行く」

ピッ

ソニック「行くか」

リング「ああ」

シルバー「どこいくんだ？」

ソニック「テイルスの所さお前はどつする？」

シルバー「俺も此処が何処か知りたいしついてくぜ」

ソニック「よし行くぜ！」

ソニック達は再び走り出した

新たにシルバーを仲間に加えたソニック達

ここからが本当の始まりだ

超能力者と音速と（後書き）

本当はソニックとシルバーを戦わせたかったけどどういつ展開にすればいいかわからずカットしました

作られた存在と世界（前書き）

今度はこの世界の事がわかります

作られた存在と世界

今ソニック達はティルスのいるクリスタル村に向かっていた…

シルバー「へえリングって記憶がないのか」

リング「ああ」

シルバー「まあそのうち戻るさ」

リング「だいいいな…」

ソニック「クリスタル村まであと少しか…」

クリスタル村

ティルス「ソニック！！あれシルバーもいたの？」

シルバー「ああ」

ソニック「テイルスここは何処なんだ？」

テイルス「うん…調べてみたらここは創造と想像の世界…いわば作られた世界だよ」

ソニック「え…」

シルバー「え…」

二人「ええー！ー！！！」

ソニック「どういう意味だよテイルス？」

シルバー「もう少し分かりやすく言ってくれ」

テイルス「えっと…簡単にいうとなんか凄い力を持っている人がいてその力を使って自分の思ったような世界を想像してそして世界を作った…こんな感じかな」

ソニック「村の人達も家も木とかも全部作られたってのか？」

テイルス「うん…」

シルバー「そんなこと可能なのか？」

ティルス「どんな力かは知らないけど…」

リング「ま、まて！」

ティルス「なに？リング」

リング「作られた世界だと言ったよな？」

ティルス「うん」

リング「じゃあ俺もその力で作られた存在なのか！？」

ソニック シルバー ティルス「！！」

確かに最初にソニックが会った時からこの世界にいたリングも例外ではないのかもしれない

ティルス「それは……」

シルバー「でもリング記憶がないんだろ？俺達より早くこっちに來てその衝撃で気を失って記憶をなくしたかもしれない！」

ティルス「確かにそれもあるね」

ソニック「まずは記憶を探さないとな」

リング「ああ……」

ソニック「……ん？」

ティルス「どうしたの？」

ソニック「もしかしてこれエッグマンの仕業じゃ……」

シルバー「え……」

ソニック「だってカオスエメラルドまでこっちにあるんだぜ？それにカオスエメラルドなら大抵の事は可能だろ？」

テイルス「確かに…まだエッグマンが関係してるかわからないけど…」

リング「これからどうするんだ？」

テイルス「まずはカオスエメラルド探しかなソニックが拾ったならまだ何処かに落ちてるかも」

ソニック「なるほどなでもどこにあるんだ？それにあんまり目立つ行動はできない」

シルバー「なんでだ？」

ソニック「リングを狙っているやつがいるからだ」

テイルス「え！？」

シルバー「なんだそれ！？」

ソニックはブラックの事を説明した

テイルス「何が何なんだかわからなくなってきたよ…」

リング「その時はその時だ、で？カオスエメラルドは何処にあるんだ？」

テイルス「えっと…」 探知機持つてる

テイルス「ここから東に行つて…チック村にあるね、詳しい情報は連絡するよ」

ソニック「よし行くぜ！」

リング シルバー「ああ！」

こうしてソニック達はチック村に向かうのでした…

作られた存在と世界（後書き）

勿論の事村の名前は私オリジナルです

チック村に向けて

ソニックとシルバーとリングはチック村に向かっている

ソニック「チック村はこっちでいいんだよね？」

リング「ああ平気だ」

テイルス「ソニック！！応答して！」

ソニック「テイルスどうした？」

テイルス「カオスエメラルドはチック村の奥にある山の祭壇にあるよ！」

ソニック「OK！」

テイルス「気を付けてね！」

ピッ

ソニック「よし行くぜ！」

チツク村

シルバー「ここがチツク村か…」

リング「にぎやかな村だな…しかしあいつらも作られた存在か…」

シルバー「…」

リング「行くか…」

シルバー「ああ…」

ソニック「山の祭壇って言ってたな。」

ソニック達は今カオスエメラルドがあるらしい山のふもとに来ていた

リング「ならばカオスエメラルドがあるのは一番上の山頂だな」

ソニック「とつとと回収して戻るか」

???「そううまくいくかな？」

3人「!?!」

そこにいたのは…

ソニック リング「ブラック!?!」

ブラック「よあああの際はよくも逃げてくれたな」

そうそこにいたのはブラックだった

ソニック「どうして此処に？」

ブラック「ブラックスターズの情報網を舐めるなリングを狙っている以上場所は大体分かる」

シルバー「こいつがリングを狙ってるのか？」

ソニック「ああそうだ」

ブラック「ブラック・クロウだ以後お見知りおきを……」

笑いながらシルバーを見るブラック

シルバー「なんでリングを狙っている？」

ブラック「教える必要がないだろ……」

リング「……お前この世界がどんな世界か知っているのか？」

ブラック「……どういう意味だ？」

リング「…お前は作られた存在なのか？」

ブラック「…」

リング「お前は一体…」

ブラック「うるさい！…気にさわるやつめ！…」

リング「！」

ブラック「兎に角もう逃がさない！覚悟しろ！…」

ソニック「今は逃げるぞ！」

シルバー　リング「ああ！」

ソニック達は山の中に逃げていった

ブラック「もう逃がさん！」

ブラックも山には行っていった

こうして新たなおいかけっこが始まったソニック達は無事にブラックから逃げられるのでしょうか？

チック村に向けて（後書き）

ブラックのプロフィール

名前 ブラック・クロウ

性別 男

年齢 ？

性格 冷酷 冷静沈着

なんらかの理由でしつこくリングを追いかける とある軍事企業ブラックスターズの幹部 ほとんどの事が謎に包まれている

山の奥のやり合い

山にはいつていったソニック達とブラック

ソニック「ここは別れた方がいいな」

シルバー「だな固まってる見つかり安いからな」

ソニック「リングを一人にすると危ないからシルバーついてやってくれ」

リング「別にいいがソニックはどうするんだ？」

ソニック「隙を見てあいつをやっつける」

シルバー「危険だぞ！」

ソニック「何言ってるんだ何も無い冒険なんてつまらないだろ」

シルバー「相変わらずだな」

リング「…頑張れよ」

ソニック「お前らも気を付けろよ」

シルバー「いや待て」

ソニック「ん？」

シルバー「流石にお前と言えど危険だ俺にいい方法がある」

リング「どんなだ？」

シルバー「…」

リング「いいんじゃないか？」

ソニック「じゃあ行くぜ！」

ブラック「どこいった？」

シルバー「行くぞ！」

リング「ああ」

ダッ！！

二人は走り出した

ブラック「見つけたぞ！」

ブラックは持っていたマシンガンを撃った

シルバー「このまま逃げるぞ！」

リング「ああ」

ブラック「ちっ…素早いな」

ソニック「ハア!!」

ドカツ!!

ブラック「グア!!」

ソニックがブラックの背中に思いきりスピニアタックした

ソニック「どうだ!!」

ブラック「ちっ!!」

ソニック「なかなか強いな」

ブラック「貴様…」

ソニック「はあ!!」

ソニックはまたブラックにスピンアタックを繰り返した

ブラック「くっ！」

ブラックはギリギリの所で銃を盾にした

ブラック「死ね！」

ブラックは銃を撃つがソニックはひらりとよける

ブラック「くっ…」

ソニック「諦めたらどうだ？」

ブラック「今回は俺に勝った褒美にリングは今は諦めるがいずれお前を倒してリングは捕らえる…そして…」

ブラックはそこまで言っていると木と木をつたって奥に消えていった

ソニック「何を言おうとしたんだ？」

シルバー「ソニック！！」

リング「やったか？」

ソニック「まあ攻撃は出来たが逃げられただけど今回は諦めるってよ」

シルバー「じゃあまた来るのか？」

ソニック「あいつは絶対また来るさリングを捕まえるまでは」

リング「…行くぞ」

ソニック シルバー「ああ！」

無事にブラックを追い払ったソニック達ソニック達は山の山頂にあ

る祭壇のカオスエメラルドを取りに行くため足を進めた…

山の奥のやり合い（後書き）

バトルシーンが地味ですがご了承ください

祭壇のカオスエメラルド（前書き）

ソニックの動画見てたら更新遅れたあああ
…

祭壇のカオスエメラルド

ソニック「ここが祭壇か」

シルバー「あつカオスエメラルド!!」

ソニック達はいま山の山頂にあるカオスエメラルドを見つけていた

リング「凄い場所にあるんだなカオスエメラルドって」

ソニック「…」

シルバー「…」

ある意味凶星だカオスエメラルドは普段あり得ないような場所にあるのだから

ソニック「さあ回収だ」

ソニックがカオスエメラルドに手を伸ばし取ろうとすると…

シュ

ソニック「What!？」

シルバー「んな!？」

リング「え!？」

なんとカオスエメラルドが消えた

ソニック「カオスエメラルドが消えた!？」

シルバー「何処に…」

リング「お、おい上を見る!」

ソニック シルバー「!？」

二人が上を見るとでかい飛行船があった

ソニック「…エッグマンか？」

シルバー「いやちがう！」

リング「おそらくこの世界の者だろうな」

ソニック「あの飛行船のマークは…」

シルバー　リング「ブラックスターズか！？」

そう飛行船には黒い星が書かれていた

シルバー「じゃあカオスエメラルドを奪ったのもブラックか！？」

リング「…」

リングが目を飛行船のハッチに向けると何者かが上に登っているの

が見えた

リング「あいつは…？」

リングが目を凝らして見るとその者は羽はついてないしロープも使わずハッチに上がって行くのが見えた

リング「あいつは上がっているんだ？」

更によく見ると…

リング「！？」

ハッチに上がった瞬間姿が見えたが…

リング「あいつは…」

リングはハッチに上がっていったやつが…

リング「俺…？」

リングはあの影が自分のように見えたのだ

ソニック「クソッ!!」

飛行船は行ってしまった

シルバー「…どうしたんだリング？」

リング「な…なんでもない」

ソニック「いったんテイルスのいるクリスタル村に戻るか…話はそれからだ」

シルバー「そうだな行くか」

ソニック達は走り出すが…

ソニック「リングどうした？」

リング「…」

シルバー「どうしたんださっきから？」

ソニック「何かあったのか？」

リング「いやなんでもない…行こうか」

そう言いリングも走り出す

そしてソニック達はクリスタル村に向かっていった…

しかしあの影はいつたい誰だったのだろうか？

リングはずっと考えていた

あれは…自分？

自分は…

誰？

祭壇のカオスエメラルド（後書き）

明日から旅行だ八丈島から東京だーしかし更新はやめません なん
せ携帯なので

新たなる村に

クリスタル村

ティルス「で…カオスエメラルドを取られたの？」

ソニック「ああ悪い」

ティルス「仕方ないよしかし新しく反応が出たよ」

シルバー「本当か？」

リング「反応があつた場所は？」

ティルス「んー…とローズン村だよ」

シルバー「この世界は変な村ばかりだな…」

ティルス「ここからずっと北に進めばつくよ」

ソニック「よし行くぜ!!」

テイルス「でも…」

ソニック「？」

テイルス「なんか変な反応があるんだ…気を付けてね」

リング「変な反応？」

ソニック「大丈夫だ気にするな！」

シルバー「しかし危ないかもしれないぞ」

ソニック「心配するな!!」

リング「お前が言うとは故か信じられるな」

テイルス「ソニックらしいね!!頑張つて!!」

ソニック「OK行くぜリング！シルバー！」

シルバー「リング「ああ！！」」

二人は元気に返事をするがリングは顔は元気にみえるが目が寂しく感じる

ソニック「…リングやっぱりなんかあっただろ？」

リング「え…」

ソニック「目が寂しいぜ」

シルバー「なんかあったんだろ？教えてくれよ」

リング「別になんも…」

シルバー「俺らは仲間だろ？」

リング「え…」

テイルス「そっだよ一人で考えないでさ」

リング「…」

ソニック「いつまでも固くならないで少しは俺らを頼れよ!!」

リング「…そっだな」

テイルス「え？」

リング「少しは皆に頼るようにする…」

シルバー「じゃあ何があつたか教えてくれよ」

リング「実は…」

リングは自分そっくりな奴の事を話した

ソニック「ふーんなるほどな」

シルバー「まあそのうちわかるさそれに…」

リング「？」

シルバー「お前はお前だろ？」

リング「！」

シルバー「お前に似ていて敵だからってお前じゃあ無いんだからさ！！
！！気にするな！！お前自身はここにいるだろ？」

リング「そうだな」

ソニック「よしローズン村にGO！」

ソニック達はローズン村に行くために足を進めた

新たなる村に（後書き）

なんか捻りがないな…

ローズン村へ（前書き）

しつこいあいつ登場

ローズン村へ

ソニック「ローズン村にはカオスエメラルド以外の反応があるって
言ってたな」

シルバー「ああもしかしたらブラックスターズかもな」

リング「だとしたら急がなくてはならないな」

ソニック「速度あげるぜ!!」

ソニック達は風のような速さで走って（飛んで）いった

リング「そろそろローズン村につくな」

???「いやローズン村には行かせない」

ソニック「ブラック！またお前か！！」

ブラック「リングを捕まえるまでは追いかけて続ける」

シルバー「あの時何故カオスエメラルドを奪った！！」

ブラック「…何故だと思う」

リング「力のためか？」

ブラック「半分正解だな」

ソニック「…カオスエメラルドとリングが狙いで村に来たのか？」

ブラック「そうだな俺はリングを捕まえる事と時間稼ぎさ」

リング「このままだとカオスエメラルドがまた奪われるぞ」

シルバー「ここは俺が時間を稼ぐからソニックとリングは先に行け」

ソニック「シルバーいいのか？」

シルバー「迷っている時間はない」

リング「…頼むぞ」

シルバー「ああ」

そしてソニックとリングは走っていった

ブラック「待て！」

シルバー「はあー！」

ブラック「チッー！」

シルバーが超能力でブラックに石をあて動きを止める

ブラック「邪魔するきか」

シルバー「当たり前だろ」

ブラック「まあいい相手になってやる敵は減らした方がいいしな邪魔したこと後悔させてやる！」

シルバー「いくぞ!!」

ローズン村

ソニック「シルバー無事でいろよ…」

リング「カオスエメラルドは何処にあるんだ？」

ソニック「今からテイルスに聞く」

テイルス「ソニック！！カオスエメラルドの場所がわかったよ！！」

ソニック「ナイスタイミング！何処にあるんだ？」

テイルス「ローズン村ね奥にある洞窟にあるよ！」

ソニック「OK」

ぴっ

ソニック「いくか」

リング「ああ」

そして二人は洞窟に向かっていった

カオスエメラルドをとるため…

シルバーを安心させるため…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3750z/>

とある冒険～星と星 時空と時空 運命の巡り合わせ～

2011年12月31日22時50分発行